

教員おすすめ図書コーナー推薦書

教員氏名	おすすめメッセージ
鈴木 耕太郎 先生	
① 図書名：性差の日本史	<p>2020年、国立歴史民俗博物館にて「性差の日本史」と題した特別展が公開され、話題を呼んだ。私もこの展示だけは見に行きたい！ 行かねば！ と思いつつ、ついぞ群馬から出ることなく終了してしまった。まだコロナ禍の真っ只中だった。私のような人間は他にも多かったのだろう。分厚い図録がネット注文等でかなり売れたという。本書はその図録の内容をさらに新書版にまとめたものだ。</p>
著者：国立歴史民俗博物館（監修） 出版社：集英社 ISBN：9784797680836	<p>性差、ジェンダーという言葉は、もはや私たちにとって意識せざるを得ないもの、解消せざるを得ないものといった認識が一般的だ。ただ、どうだろうか？ どこかで「なんだか、めんどう」と思っている人はいないだろうか？ そういう人にこそぜひ読んで欲しい。現在の問題を知るために、過去から見ていく。歴史学の面白さも詰まっている。歴史好きな人にも太鼓判を押せる1冊だ。</p>
② 図書名：広益体 妖怪普及史	<p>近年、妖怪研究はフェーズが変わり、また一段階、深層へ進んだ感がする。本書はそうした最新の妖怪研究書のなかでも、より一般向けに記されたものといえよう。つまり、読みやすい。</p>
著者：伊藤慎吾・氷厘亭冰泉・式水下流・永島大輝・幕張本郷猛・御田鉄・毛利恵太 出版社：勉誠社 ISBN：9784585320401	<p>本書では、誰がどうやって「妖怪」を創り出したのか、そしてそうした「妖怪」を誰がどうやって広めたのか、さらにそのような「妖怪」を誰がどうやって研究し、意義づけてきたのか、といった点を考察している。いうなれば、「妖怪の情報」について考察するものだ。妖怪とは何か、を考えるとき、その妖怪を創り、広めているのは私たち人間であることを考えれば、非常に重要なテーマであることがわかるだろう。実は本書の前に同じ執筆陣で『列伝体 妖怪学前史』という本も出ている。本書とともに手に取ってもらいたい2冊である。</p>
③ 図書名：歴史と地域のなかの神楽	<p>1960年代以降、急速に減ってきたと言われつつも、この群馬県内ではまだ春祭りや秋祭りに際して、神社境内にある神楽殿で「神楽」なる民俗芸能が奉納されている地域がそれなりにある。この「神楽」をめぐっては、民俗学的観点から様々な研究成果が発表されているが、歴史や文学の視座から神楽を見つめよう、というのが本書の狙いだ。</p>
著者：八木透・斎藤英喜・星優也 編 出版社：法藏館 ISBN：9784831862785	<p>民俗学では現存する神楽の多くは近世、あるいは近代に入ってから形作られ、継承されてきたと論じられることが多い。だが、文学の視座を用いれば、中世以来の神楽が見えてくるのではないか……本書第1部はこうした点で挑戦的ともいえる。そして第2部は近代（近世をあえて飛ばしているのがポイント）、第3部は神楽と地域、ということで読みごたえがある1冊となっている。</p>